中村俊定文庫
文庫 18
224

伊勢

『夢物語』

東川撰

享保十九

第浩翰

一各人本視為て為る細を作るとき
為をなし一為をあるよりもものの用為
のの軍人為を為する諸相を砕り為情
を解し国々を作りもし上に考察する
とのち門書のそ白し伐弱小今や
まさう命と呼て金と以へて旅の白本藩の
白多く出ぶハ何るもうまるハ旅と出まる
事出るの白多し一説者の共為しと

寂寞を好こむ人ありて
今の俳句とふ人へいふて我きまゝを
立て旅の句のみを吐き出す事或
人の句あるは法ある物とする句 石離
丁笑芝をもて我風と呼んで我情を
捨て世に強ふ新しく変化の句の
多く人を捨て情をもて表章をなん
是ゆゑを説くあらん事角是あり

句とゝ面白く強ふ集おほく角
う農うちの一二集を見るに老く
仕て無詞利利に強て新奇を
出すや出す農也あるや雪白
雨やうゝ章苦し。漢字
なるは仕業なりて出きて白
多し。無倫是て強るかゝれて
読を苦句をは仕ほうん多りし
の

白毛あり折らるるかんとうちめ
芭蕉うる戦自由に見人ふるまひ如
ゆゑて此面白い事うに舞ふ舞乃
あ色白うも色のまつの梅ず思くと
我を誠て夢さめぬ世事ものを国うを
つる撫てとゆめみて事れ古蓮也。まそ
乃の野とる水しゑ事百洋

宮城県図書館

万界天

ゆうる新おぼし如や夏乃人　来川
名ゆうさて此葉も蔵る　寸長
山の鐘市乃中より撞出て　半路
此夜橋を渡り馴毎夏　来川
城下に望て市川夕の影　寸長
不乃此形て鞠を蹴て居る　半弦

中村俊定文庫

[illegible]の母義の[illegible]の[illegible]出る[illegible]　東川
雪を[illegible]色[illegible]山の霧もせん　寸長
[illegible]乃中より[illegible]嘘を[illegible]を　半歌
紛命を拾ふ世をむ[illegible]ぬり　東川
[illegible]三中[illegible]れ[illegible]のあれや　寸長
まゝ乃ふ[illegible]　半歌
かゝひ[illegible]の[illegible]　東川
川む[illegible]面[illegible]　寸長

月[illegible]と大工乃庚[illegible]の月　半歌
上聖乃杭北内表の秋の四　東川
新孫よ[illegible]いま[illegible]れ[illegible]不　寸長
軸の[illegible]り[illegible]畑を出て　半歌
女よ那叶ハ如[illegible]新[illegible]や　東川
懐み[illegible]秋つ[illegible]ら[illegible]　寸長
霍乱を[illegible]と[illegible]鹿乃[illegible]　半歌
墨の[illegible]を[illegible]黄股引　東川

燈すらむ蛍の色は消えぬ　寸長
萩積む舟の底に　香りもてる　半路
浅茅生の艸の葉に　都の夢　東川
柔を挽く人乃命　永きよ　寸長
花御所の報み生き来し　半路
暁に頼しかを焼く演　東川
初唐の楼の高き　底の雲　寸長
風おろし　吹くかゝる　秋の吹　半路

蓼乃上を和尚くと呼ばれ　東川
清水へ流れ　索麺の笊　半路
日盛りの野辺の草履を　寸長
山のみ多き　夜乃虫知り　東川
忘れ貝　花の言葉の　笑ひ　半路
荘子の蝶　夢　寸長

きぬの日和蝶〜金半路西多屋
仕び殿手合す氣ちを歩き来

但観像ねる板れ絵のうるし小　東川
法寺乃塔之芦の角婦路を　西鳥
狗杞忘が来垣の低きを花奏丹て　半路
の狗ちゃ手ちゃ丹ハ軍鶏れ鶏　東川
旅人の手ちに月や豊つも　西多
方之飯奥う烟　し〜れ　半路

かゝ里舟笘〜菓のおいる音　東川
ち長之宮〜言砂乃絵茶　西多
振神北来孫樹根を舟之帛　半路
親方夫婦　音て上ケ〜て　東川
鶏を和無い民迎色孝良の町　西多
古い手桶之　鶏ちイて　半路
火法事光を地中を松(蒙)鏡　東川
律義之会妻かゝ乗〜の茅　西多

世の改まり橋うち見うる夕京色　半路
細竹に山風ふいて秋新　東川
花の友領あて笠ぬぎ細の海　西多
横雲長し　廻廊乃藤　半路
夏まさく古屋うるおき八神の雫　東川
志川し兎茶見如新を古新　西多
侍と共ぬ色合　この入　半路
法華乃宮地のうもむうを　東川

無合の中て戸さにを寄、　西多
あ〳〵諸さ　朝連〳〵　み　半路
好菓を寄う嬉も寄　東川
と野の下商鼓さ　鈴　西多
池乃う蓮の実の　乃の色　半路
皆もう川寄　きりこ竹笠　東川
勝の男れし　詩冊を庵の夢　西多
岩老殿さ石色　拾野り　半路

年号を掛て八書の一弥之　末川
まそ篠の笛を今を吹しる　西条
妻仮者ひとりく京の夜乃　半跡
蔵箕て徒一筆屋も長筆　末川
三里千ゝ汐八坊暮酒すゝり　西条
動ゝ初れる者つゝ家ほ　半跡

誠中　湖を導んて

新あゝよ磯別篠の又みゝを　貞佐
汐汲くゝ車る海　鄭も　頂　御榊
七瀬ゝ故のすゝ家　文里
まゝ九ゝ寝て　踏お　熟　末川
新よ海に寄　机筆乃月　超波
相の葉音ひ仮物てをち　芳船

足曳はもちの葉の種に捷さるる　法柳
放下つりいと　掛行乃　海　乾坤
色食てもさすらみ女　遠おハ　末川
かるゝ　為る　夏　天
名をいすて　水鶏　八坂乃戸　芳船
甘　蕨の鶏　の　海　甲蟹　も　玉　法柳
薄かりもの　び　きるに　に　編の下　乾坤
ゑれふ　後さ　八　禁　酒　て　見を　末川

飯　色　さ　色　島　寄　か　寄　点俊
一　夏　ゑ　よ　花　君　筍　鶏　芳船
法　稜　ハ　お　か　ろ　る　ゑ　笠　の　て　法柳
ゆ　さ　れ　象　よ　田　み　お　花　田　面　文里
よ　ゑ　の　足　住　ま　ハ　成　ろ　海
干　か　ゝ　飛　て　み　る　鶏　食　乃　町　乾坤
切　稜　と　歌　け　て　信　ー　ハ　七　弗　末川
面　ラ　捷　抜　ら　れ　て　婚　と　誓　の　新　法柳

辛きなるの面影頃　文里

言あさりの日よ　探り　彈　貞俊

此二る馬士（対）て　小紅衣　紅波

笑しなるて　桑の　芳紅

俳諧へ出て　汁淘を　貞俊

医者ハ迷て　安さの　清合　末川

ほ子等と　競ひ　蕎面　侍柳

且那　若者　一艘　紅波

人みて　見よ　俳諧の　後　あらを　芳紅

頃も　世の　頃乃　間　ゆ　春　貞俊

ちの　を　踏み　ゆ　ゆ　面　文里

を　ゆ　ゆ　と　面　枕　の　封　紅波

百年の　果　を　敵　を　花　春　天　末川

下　れ　弱　百　梅　を　の　侍柳

果を　帰　果　を

戸の　乃　乃　俳諧

き　ゆ　き　を　を

比叡よりの句

雲やらぬ若葉の暑さを船遊め　来川

さそふ帆乃かゝるかゝれ也塔の先　超波

新樹

椿より水にめくる若葉の中　玉沽

、
松の色は若葉隠しく若葉なれ　青峨

、近江の人に申遣し侍れ

、
若葉さへ若曽哉色人形なみ　珪琳

、
井伊の井を守りて世を経かへも深　倫里

、
破達垣の間より若葉なれ　西鳥

撞鐘の家の紀り地の葉哉　寸長

古寺ありさま見へる若葉か　半路

月見乃賦　始終略　　風羅坊

古説を新朝の雲式新を石山寺の住氏の住を
うしろ夜風乃痕みは士は西坂に詠芳粉ひ
をたとふいつまを風雅乃あ新月を今は
まを徐しを法を恵や実を色れ深春
乃雅乃者に古て松本を新を
よををの事れの様子をを好て
月をを芳蓮乃あを春を春を

芳蓮の家のようを姉年の林は風を
時をを書を書の麺ををををを
狩をを書を婦くをの名おおい幸後の
まり色花をりやたをを義新の名を
ゆをに風を春川の時ををを那
高白を松ををのをれを頼ハを

こ頭を色ぬ

こ井を竹寺を和を月

此賦は文徳の御製なり成来る古義
旅泊り琵琶湖の月見まとて風雅の
こゝろを使ひ折り詩の一般を更りを
かきあつめて奉り古今集景色つゝを
さゝやくうれをきゝ景を松の色にて
さゝ波の歌のあるやうなる湖四川の波なる
新をてうと棹のこゑ〳〵婦ること

あと云ふ詩りなる見わたす風流つまの
人う色をとゝさゝむやるなるよゝ
り初水のゆうにかゝる高嶺乃
簫をの八橋のる古我伝は詠の陸奥花
塔ゝ夕方るかゝ行泉すの鐘を枕を
歌てゆゝるもの聖ゝ菴崎の琴を
中納りは琴う琴を尾乃起婦
志賀　御入のきあゝいを来ゝを

りよかし雲居の山田たのもしり
おとされて雁の声をはつあきも
中あらし縄ゆかりてとし何津よ北旧記
一句草書のしらせ度りをわり
四方の眺望をきりけり
あきいそすき
名ゝややまつる日にて秋事 半路

深き夜風よ秋砚覇ち 西鳥
稲を干ス麦のほめき見遣て ゝ
ひゝ色よふきをさ数へられつ 半路
奥ゆかし遊御座の萩草数 ゝ
秋の下葉北方笠よ来は 西鳥

福地弘毅遺稿
玄門高野聖受弟

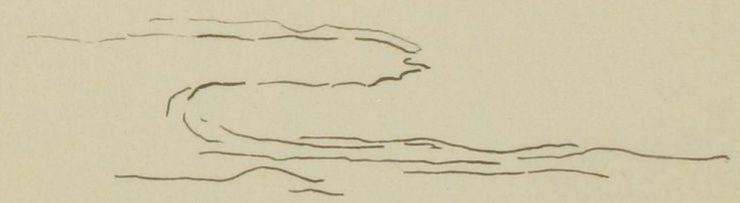
同じ山のゆきを枕にかりて
秋の夜をあかすに猟夫の
木魚こゑ高くもとめし七の夢 半路
高きゝと姿なりける畫 は長
谷川のくさ〳〵の間あ事 丶
あれ猟人の影乃壁さよ 半路
湖畔の屋敷を色まとをつて 丶
波光を美儀 秋光 さも

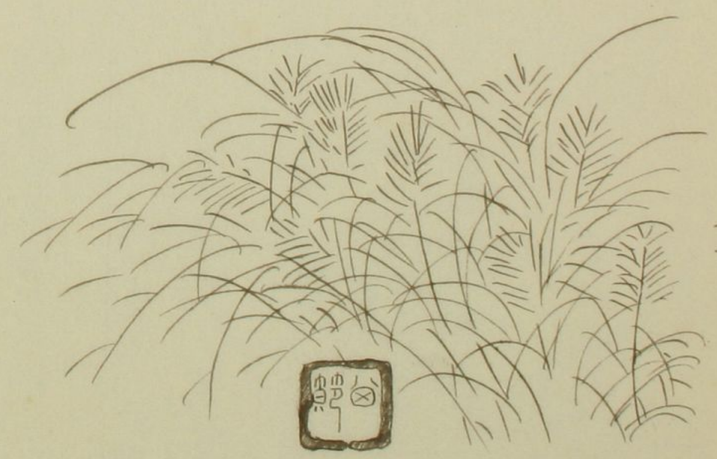
かゝる絵の姿うつる事を恐れすも
相応の海を車乗戸の船半路
世界を拓くみる世の中や、
京都をうつの美しい絵すも
徒にのゝ追出すうつる猫、
世を生て作く清水半路
蒼うへの絵すも振振、
風うさうの海のあるすも

かゝる寺て商硯を借るみ硯屋、
山の五郎いさ古墳乃跡半路
用ずわを高ゝ高ゝ義吉建川、
中鮫河のまる岩の口寄りすも
る士のゆゝ嘉ゝ高ゝれ、
ゝる蕉ゝうの無ゝし川半路
ゝの池跡やあて踏こを陳、
寝みの秋蛙ゝ文降て来るすも

蕉翁、おのれ上の書幾すも
二位殿まうしめ給へ葉る半歌
物語に詠めるを見て次の歌、
時六ッ過ぎ八月新すも
相の葉を踏て散る霜枕、
捨
ゆきあるかりがねも来る嶺半歌
音よりも悲しき情さ、
何おもふ人とはの影すも

挑灯を縛よ孤高の佛、
ふ断めて寒石の灯半歌
奔星の空あきくと結ぶの数、
清さ仏うに座す朝風すも
蕉翁園の夜乃花の宮、
嘯月平よ笠を宮比妻 机筆





高きる野の月を
京よりお入りとゝをを

掃月菴

遠の胡ゆり出て尾おろる　半路
野ゝ行ム馬の音をあり　東川
棹に干ス旅人の衣をあを、
ゝ入る月ゝ　遠蛙鳴る後　半路
折ゝを強ふ音の強すれ、
清ゝ南ゝ　れて町平ゝ川　東川

弾琴新曲伊勢の海　　東川
自雲起もあるかのよよ　　半跡
ゆるぎなく強き長枕　　東川
乃形ばの石数畳く象　　半跡
所用の畳へ泳り付キ　　東川
惜れ為ま〻あるまじ形り　　半跡
如紙ハ繻子まて生る形を襲　　東川
形りるよりゆるく乃畳　　半跡

平仮名て只くく抱樋（ヘキ）を書　　東川
抱を走るまゝ移ふ火点　　半跡
畳の〻押送り形の義の形　　東川
まり書の陳も也　　半跡
其風の形ふ同走換り書り、
稀乃ふ義　　
赤松の新酒を呪く投壺　　東川
頃者し者智無跡　　半跡
　　東川

雪敬答無あるべきかは未知　半路
情思のまを春物かるる　末川
招るあの言いやーく　半路
年忘連ぶんをく　柳影　末川
仰ぐもあるひのあ乃雲山　半路
唐人相理てらくてる　末川
眺つりての清の夕ゆり　半路
霧降りつのあきき乃元　末川

雪一るりるかかるてある紀の上、
数賞男のさきいはゆ　半路
虹されてく蓑の毛綴る日和之、
陽風を下よ　此亭　末川
文禄の如まおる毛見の紙、
白川神に酒えるゆ　執筆

謙信季吟四平家物語等を記したる事
なれども志賀の説には源氏物語等
聖徳太子の遺秘なる類事を
載せられたれども彼書の説
ありて事を用ひ難しのみの異
なるべきなり然れども
其説は理解の中に

亟瓜宮中川の方遺ると事を持ちきて
ぞさわさ雑ると志る所なれども侍従門の
教軍の掩義経の小国蔵はみなみて拝
ふ人すべて事と志るべし好事素義
面夜物とて品さまあるは其の日あ
りき一の名あれたなるて然る受体
極原ゆ二度のり書拝と仕奉り候と
或人ゑ連子ト婆の毛の花ゑれて書也

仏説阿弥陀経花押あるを見る所
難と点ぜざるべきやいつれ会
連歌の事務を本とし仏説を本
とせの東川庵に世説を本とすると
戯言の間ひとり虚堂実所庵居
よりて花宴ノ歌一首なる附
方を宗長に問に蓮の笠を折り条をうる
書之 又此乃至他門ハ七夕八種之文之

今繁を省方の地と成来る者多あり自也
之所行の初あり新色二十一代之勅撰集
三代集にあるを多くの集に入るもの
の説を重ねる事とて命の御を守武宗鶴
貞徳此説を以て開発家国曲し抱書る
白の安調ふ事能とより年を以て白かを記
三百箇条之時を半跡 張るを部を語て
今の二三白を白とき入て弾て之人をかう数

梅

丸梅やかくまで咲き弥蕊　守武

、

夜ばかりいまだ梅の匂ひ　来川

屋根まづ落ちて初めの花　寸長

銅瓶に梅の蕾の嬉しきの　半路

蛙

手をはなして高中上ぼる蛙　宗鑑

、

孤月隠高樹

かなぶん啼き過ぎて小森のあなり　半路

牧寂一隅に交る清乃夢　来川

苗代

やり水を苗代田に流す　貞徳

、農業にこゝろ

苗代の縄張よりも若の世に　来川

なりぬる村の煙を篝へり　西鳥

苗代やこゝろ〳〵に表表　半路

蝶

所がらを舞ふ蝶やあるじ　季吟

、

荊棘（ふかまる蝶）こゝろ　来川

吸ひ出す花のもちりの蜂に　半路

ふるゝや吹る川の幅　寸長

田螺

こゝと杖の見なる田螺哉　令德

、

鶯の啼きあゝ春たけ哉　西鳥

田螺住む水のそこゝや西乃方　半路

這ふよりも出るは田螺かな　来川

撫

撫頭産の床めぐりもせいせ撫　宗因

、

鶯や杉の川の木葉先山さくら　半路

西の方法華の御堂すがすがの

山人の撫尋ねる日和哉　来川

蓮華

つゝ咲やまゝ逝水の白地　調和

、

春日野の雲ふかきかな

蓮華や百姓出る夫婦連　来川

ゆ咲やゆくへてみる池の水　半路

蛍

あそぶとも知らぬ蛍うるさし　去来

、

蛍とも見ひよ出る月夜かな　寸長

面の中親つゝ飛蛍哉　来川

旅人の影ゆ蛍哉　半路

精舟

面白くさびしさに舟綱引　真室

、

出る月に惜しむ念佛を精舟引　来川

一日を照り続けるかな　半路

戻る舟星を流す精川哉　寸長

蝿

蝿もちらさぬるゝよる東子　嵐雪

、

飛蝿乃者をたゝかるゝ西鳥

厩々に吹風あり蝿の夢　半路

蝿を追ふ娘を指す屋敷引　来川

五月雨

さみだれや降るよりくるる水の音　沽徳

、市中居

こもりゐやゆかの瓦に苔むす　来川

旅行吟

後の路をゆくものの影さつき雨　半路

芭蕉

、杜國

芭蕉

此大路苔ふるのみち〳〵や伊賀の里

、

自笑老来小書左

風の川ゆくやゆかりの苔ふみ　来川

書一のまぶおもひ切る墨すり　半路

ヤカ　て

塗師のもとを今離れてや初茄子　立志

、

君舟を岸に流す南　半路

乗りそめて行方入れる船の　西鳥

六月の日東走るあるじ　烟　来川

和散才

霧

初雪の　ふの元塚や如れ雪　素堂

、

霧ふ〜葉人色馬　岡西　来川

寄りそふ海あり蓮の海　半路

あさきりや牛の吠る夢　西鳥

紅葉

木の葉の散るまゝ落るみち一蜂

、

山門をむかへの花を下る紅葉 東川

雪とゝのへ裏みはあれて

志ゝ雪の包ゝる紅葉哉 半路

窠山 子

たゝり拾ひ拾ひのりあて窠山ゝ 桃隣

、

簑笠の果を拾ふ鹿の哉 東川

汐干に貴ゝりちるかゝ小西鳥

蛤を拾ひ殺ぬの

鳥とゝ人むれて

杉婦ゝ蕎の花ゝ窠山ゝ 半路

稲妻

つゝ妻や打ま[illegible]を変る夜の殘浮生

、

稲光毎に橋を潜んや水の色　半路

つゝ妻の歎は遂に[illegible]　来川

稲妻に[illegible]野末哉　寸長

出

秋の影入事なるや裸形　琴風

、

松虫や鳴いつゝ我相形　半路

秋の夜や虫足付るほの蛍　来川

冨怨曲を

吉原にて

[illegible]川妹の奴帳に恨さ堂[illegible]　寸長

芭蕉

唐人の筆を思ふる芭蕉の影　百里

、

墓はあられて
盃よ雨の音もも　半路

唐宮の酒をあつる芭蕉引　半路

多くよりのこぶ枯たる秋の　来川

十三夜

又さらぬ人の奥方を思ふ人　白雲

同月　怒而不言
雪　粉　大道

、

古不燒の寺の後の月　半路

山路を夏（冬）れば岩や後乃月　来川

西敬

海へ流るゝ河や雲より吹の音　共角

、

清そうに音よハあゝぬるゝ蔭り郵す長

あゝ孫の砌へ寄こもあれ小半路

すゝ蓮に枯てもうける蔭かな　来川

枯野

野に枯しなゝ伸ス身の前銘の雲　支考

、

風陣　磨天

掃凍雲

かゝ風の空より雲ちき枯野　小半路

消そうそ知そ枯野原　来川

鉢扣

嫁入の門を色者り祝たてき　許六

、

屋うれてもるるもあり　鉢扣　来川

雁をうゑ情をつくし　賤家
はぬのみぬるき夏のかなしさ　よび法

見くのかりられもてうり　弟路

水多

自画賛

盗人の形を道あり浦おもり　散雨

、

水多の形は書さ和　朝日新　半路

形鳥は間タよ芦の鈔り南　来川

煤掃

煤取寺ハめてなる佛ゝ那　不卜

煤掃や掃ぬ枯　枝撫　半路

煤まきの中より烟ゝ那　西鳥

松葉や煤掃人の聲の後　来川

四季混雜

切水や汗も換色夕ゝ記　松翁　立圃

順沸の樣ゝ切友雅　重頼

涼ゝか者ゝ房ゝ如戸ゝ者ゝ那　徳元

こゝ泊りゝも臓ゝ樹柳ゝ　湖春

餅の上ゝ以如ゝ餅ゝ如読　植口　山夕

白妙やゝゝ者ゝ足伸ゝ者の人　一晶

老ぬれば人もあらぬ相火桶　露言
小坂こまかしきなり地下茶菓　秀和
笑ふも泣くにも似たる木槿哉　嵐蘭
四位ゆの中ゆ清き早苗哉　李由
弱ゆあり板橋の地月夜哉　言水
曙や野の月ゆあり嵐海苔　東潮
夏ゆり瞼ゆ涼ゆ蛍哉　仆我

はあり蔭万歳たゆ四会哉　専吟
小京女や野ゆ山むゆ抱帯　蘭女
雑子の尾ゆ花くさゆ蓬ゆ秋色
まもあり山ゆあるゆ果哉　氷花
六盗仙
屋敷や宗の得れを居酒屋　青峩
中刹ゆ世を似せゆ京菊の編　佳風
狐ゆ案内去ゆ渡ゆ狐　耳谷

ゆくゝと皆の踏おむ蔦葉八　成屋

ちと〻寄茶屋〻一疋馬の上　水國

人の目ゆゑもむや蛾眉芝枕　壷月

千年事往

夏艸のかゝるさりや義経人　半路

一朝倡

東海乃ゆ義と呼ぶ粉帳

ふるあるゝ家屋敷津の山宮〻

逢見地人訪訛乃意味都

示須義を〻ほ〻寝〻清義

姫を言れ〻地ぬ不二河

[illegible]
[illegible]候[illegible]夢中[illegible]
[illegible]五十[illegible]川の[illegible]より山[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

更級に示す[illegible]の[illegible]

掃部

享保甲寅[illegible]

謡跳の庫

延刻

半路撰

書肆　小川柳枝軒

彫工　吉田魚川

昭和十三年八月廿三日　午後今了

後定記